



# 九州・沖縄一丸となって強くなった高校野球

監督親睦会の活動は、まるでベンチャービジネスの見本

糸乗 貞喜

(よかネットNO.29 1997.9)

- 3 ベンチャービジネス論

この10年の強さは特筆もの

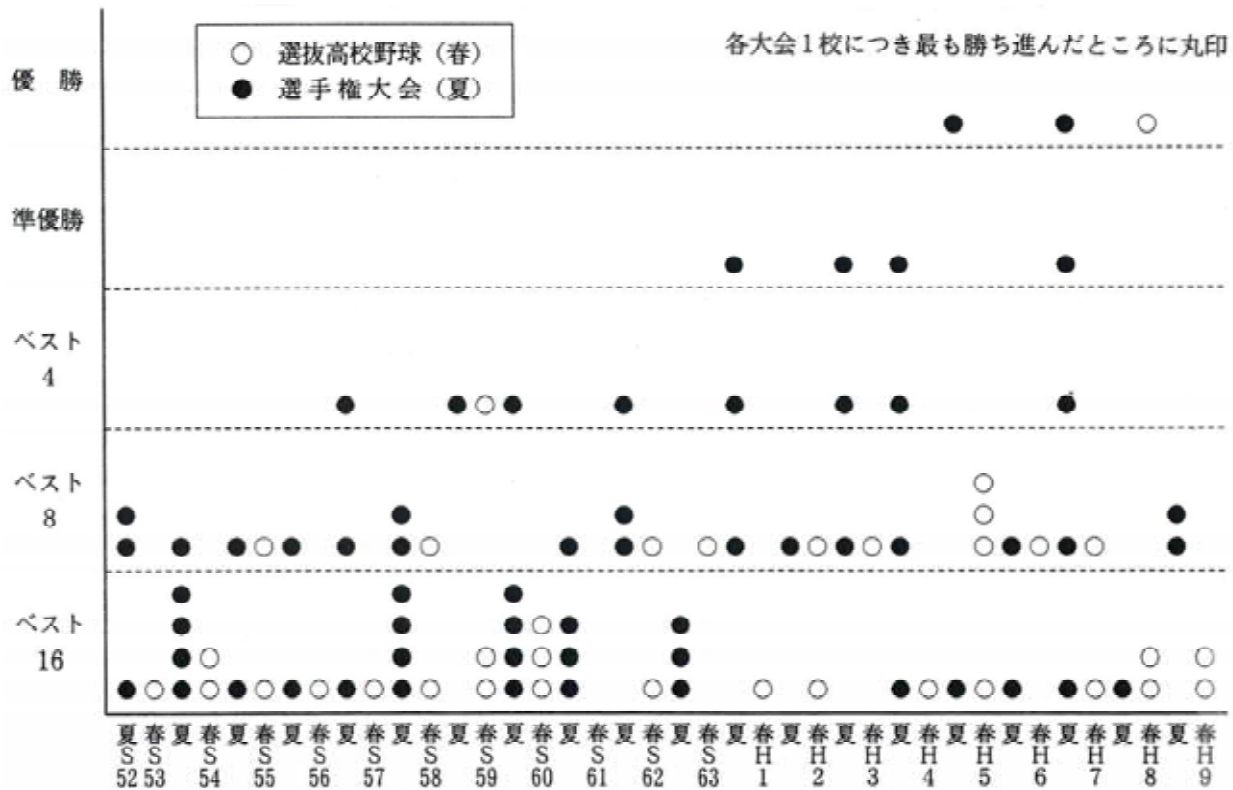
九州・沖縄の高校野球の成績を示す図表1を見ていただきたい。最近の10余年の上昇ぶりはすばらしい。1994年(H6)の夏の大会では、ベスト4に佐賀高、柳ヶ浦(大分)、樟南(鹿児島)が残り、佐賀商が優勝し樟南が準優勝となった。96年の春には鹿児島実業が、92年夏には西日本短大付属(福岡)が優勝している。この10年で見れば優勝3校、準優勝4校(福岡第一、沖縄水産2回、樟南)、ベスト4が4校となっている。それ以前の10年間のベスト4が5校とは比べものにならない。これは容易なことではない。

正直いって私は、高校野球のファンとは言い難い。

まして関西生まれの人間にとって、九州の高校は校名と県が結びつかないことも多く、決して関心の強い方だとは言えない。しかし、今後は変わりそうである。

そのきっかけとなったのは「九州一丸で強くなれ、監督会が支える高校野球」というテレビリポートである(97.5.18、これはNHK宮崎によって製作され、九州・沖縄地区で放映された)。

その日は書類を片づけながら、テレビの音を聞いていた。はじめはそれほど気にもとめていなかったが、「監督会によるネットワークによって...」、「親睦会によって交流が進み、全体のレベルアップ...」などという言葉が耳に入るにしたがって聞き耳



図表1 九州沖縄勢の甲子園における成績 高校野球の全国大会(春・夏の甲子園)における九州・沖縄は、昭和63年以降たびたび決勝戦まで進出するようになった。平成6年夏には九州勢同士の決戦(佐賀商-樟南)まで演じている。10年以前までは16に進むのがほとんどで、ベスト8が少しという状況だった。ところが、この10年間はベスト16、ベスト8を突き抜けてどんどん上へ勝ち進んでいる。この九州・沖縄が最近強くなった秘密は、13年前に始まった監督親睦会の交流にあった。

第59～68回大会（S53～S62）ベスト16以降進出校数

	ベスト16	ベスト8	ベスト4	決勝進出	優勝
福岡県	5	1	1	0	0
佐賀県	2	0	0	0	0
長崎県	0	0	0	0	0
熊本県	6	4	2	0	0
大分県	6	3	0	0	0
宮崎県	5	1	0	0	0
鹿児島県	4	2	1	0	0
沖縄県	6	4	0	0	0
九州・沖縄	34	15	4	0	0

図表2 以前の夏の甲子園

が立ちだした。気になって新聞のテレビ欄を見ると「九州一丸で強くなれ…」とある。途端にピンときた。「シリコンバレーの技術開発の話みたいだな」と思ってしまった。唐突なようだが、日頃の私の九州に対する思いがそうさせてしまったのである。

結論を先に述べると、近畿、東海、四国などの野球どころのチームとちがって、九州のチームは、対戦相手となったチームが喜ぶぐらいのレベルであった。ところが、13年前に始まった監督親睦会を通じて交流が盛んになり、いわゆる名門校と言われていないチームも含めて、全体の力量が上がり九州全体が激戦地になった。それがこの10年の成果だといえるのである。

地理的距離は仕方ない、せめて心の距離を近づけて交流試合などをしやすくしたかった

この交流会は、13年前に九州地区大会が沖縄で行われた時に、沖縄水産高校の裁監督の提案で始まった。

「沖縄水産は強かったんでしょう。交流しても、自校のプラスにならないかもわからないのに、なぜ監督親睦会を提案したのですか。」

「そんなことはないです、九州の学校は交流試合も簡単に行うことができるが、沖縄の学校は強い高校との練習試合をするなどということは、なかなかできないんです。せめて九州のチームと交流試合がやりやすいようになりたいと思って、まず“監督の交流から”ということをお願いしたのです。」

これは、7月に裁監督に会ったときの話である。沖縄に行く機会があったので、電話で会っていただけかどうか聞いてみた。丁度夏の甲子園の予選が始まっており、無理かもしれないと思ったが、兎に角電話してみたらと考えたのである。

そのとき、正直に私の関心の有り様を述べた。それは、私は高校野球にそれほど関心をもっていないが、NHKテレビの放送に興味をもった、私は日頃、地域づくりや産業振興などに関連した仕事を

第69～78回大会（S63～H8）ベスト16以降進出校数

	ベスト16	ベスト8	ベスト4	決勝進出	優勝
福岡県	6	5	3	2	1
佐賀県	3	1	1	1	1
長崎県	2	2	0	0	0
熊本県	1	1	1	1	0
大分県	2	2	1	0	0
宮崎県	2	1	0	0	0
鹿児島県	6	4	2	1	0
沖縄県	4	3	3	2	0
九州・沖縄	26	19	11	7	2

図表3 最近の夏の甲子園

この10年間でベスト4進出は4校から7校へ、決勝進出は0から7校、優勝は0から2校へと増えている。

している、その眼でテレビ放送の内容を見ると、シリコンバレーで技術が進歩し、小さい企業が力をつけ、新しい産業がどんどん展開していった時の様子に似ている、ということである。「2時以降はグラウンドにいます」ということで糸満市まで訪ねて行って話を聞いた。

「本土では東京オリンピックがあり、新幹線ができて、交流のための基盤ができて強くなり、沖縄は勝てなくなっていたのです。離島性というのは変わらないですから。沖縄は左投手がなかなか打てなかった。九州にも高速道路ができていき、沖縄は一層遠くなったようでした。」

「13年前に始まったのは、まず名刺交換会です。顔つなぎです。我々の世界（高校野球の）は上下関係がきついのです。九州大会は各県で持ち回りになっているのですが、その前日に集まって親睦会をやったのです。集まる監督さんは多い時は80人ぐらいになります。九州大会出場チームの監督と主催県の若手の監督さんなどです。」

「はじめに声を出して呼びかけたので、目立ちがり屋だとか言われました。親睦会で酒を飲みながら懇談していたのですが、酒を飲むことへの批判も出てました。不謹慎だというわけです。」

「2次会へ行ったり、カラオケなども行くのです

か。」

「いやあ、大人しく話をしていただけですよ。翌日から試合ですから誰も無茶はしません。」

このあたりのことをテレビ放映の中から拾ってみると、若い監督さんが「私は強いチームの監督と知り合うチャンスだったので名刺をもって挨拶にまわっていました。何か吸収したかった」と述べている。

この会は、情報・知識の交流、練習試合の組み方などのネットワークとして極めて大きい役割を果たした。野球の技術ばかりでなく、生徒の生活指導についての悩みなどまで、若手の監督さんにとって、随分助かったと言われている。

私はインタビューのはじめに「監督会は…」と言ったところ、裁さんが急いで「監督親睦会です。」と訂正された。「監督会という組織的なものを作っているわけではないんです。集まる機会（九州大会）のときに親睦の交流会をやっているだけなんです。」ということである。何かそういう感じの批判があるような様子であった。

自由な交流こそ進歩の源泉だということ

シリコンバレーのことについて触れておかなければならない。

「現代の二都物語 - なぜシリコンバレーは復活し、ボストン・ルート128は沈んだか」という本がある（アナリー・サクセニアン著、大前研一訳、講談社）。強引にまとめると、ボストン・ルート128の企業群は自己完結型企業形態で、企業内にはヒエラルキーがあって、ヨコとの交流が出来にくい仕組みになっている。

一方シリコンバレーは、リスクをおそれない起業家精神で、仕事中は激しく競争するが、職場を離れると家族ともども親しい付き合いをしており、「同じレストランで食べ、同じバーで飲み、同じパーティーに出かける。」また、情報交換は職場内でも競合企業同士でも行われ、技術的な問題でも頻りに相談しあうような“技術コミュニティー”が形成され

ている。「技術者たちがアイデアを交換したり、うわさ話を楽しんだりする溜まり場として人気のあったマウンテンビューのバー、ワゴン・ウィールは、“半導体産業の泉”と呼ばれていた。」

オープンで、フラットで、参加型の文化

また、シリコンバレーの特色は、オープンでフラットでカジュアルな（何気ない、不規則な、普段着の、格式ばらない）企業風土にある。ヒューレット・パカード方式ということで紹介されているが、それは「共通の目的とチームワークを重視する一方で、個人の自由と自主性を積極的に応援し、ときには普段着の、格式ばらない企業風土にある。ヒューレット・パカード方式」ということで紹介されているが、それは「共通の目的とチームワークを重視する一方で、個人の自由と自主性を積極的に応援し、ときには要求さえする参加型の経営手法である」、「ヒューレット・パカードの2人は、あらゆるレベルの従業員と、急に思い立って非公式のランチをとることにしたり、廊下で立ち話を始めたりすることがよくあった。またマネージャーたちに、毎日必ず『うろつき回って』どこかで即興の議論を始めよと説いた」と書かれている。

ここにあるのはオープンで参加型の企業文化である。

話を高校野球にもどすと、シリコンバレーに学ばずまでもなく、13年前からオープンな交流（主催県の場合はどのチームでも参加できる）があり、酒を飲みながら話し合うことによって先輩・若手の垣根を低くしたフラットな関係が強められていた。

そのことによって名門校、有力県だけでなく、各県から全国大会での優秀チームが出だしたのである。

ライバル間で情報公開するということは「出すことで、逆に自分側が新しいものを作らねばならないというプレッシャーをかけることになった」のである。

弱いチームにも交流のチャンスがもたらされた

高校野球の世界についての事情通なら、誰でも知

っていることかもしれないが、私のようなものにとって「弱い高校にとって、強いチームとの練習試合をもつことは、なかなか大変なのです。」とか、プロ選手を輩出している大阪の超有名校などは「1年先、2年先まで練習試合が決まっている。」「せめて2軍との練習試合を、といて頼んでいる。」などということはビックリごとであった。

高校野球の監督経験のある知人に聞いたところでは、「弱小チームの監督は肩身がせまく、若い人とベテランの上下関係もきびしいので、練習試合を組んでもらうなどは望むべくもない。」ことのようにある。

しかし監督会によるネットワークの結果、顔見知りになることもでき、ゴールデンウィークや夏休みの練習試合などは、弱いチームにもチャンスがまわるように工夫された。

例えば5月の練習試合では、鳥栖を中心とした11グラウンドで、35校・90試合が行われた。有力校のひとつである沖縄水産校は6試合が生まれ、その結果のひとつが日田高校であった。この対戦は、このようなネットワークがなければ、まず考えられない組み合わせだということである。

この話を聞きながら思ったことであるが、高校野球では、強いチームと対戦することのメリットはないかもしれない。しかし、ベンチャービジネスの場合では決してそうではない。

そのことを強く感じた例があるので紹介する。

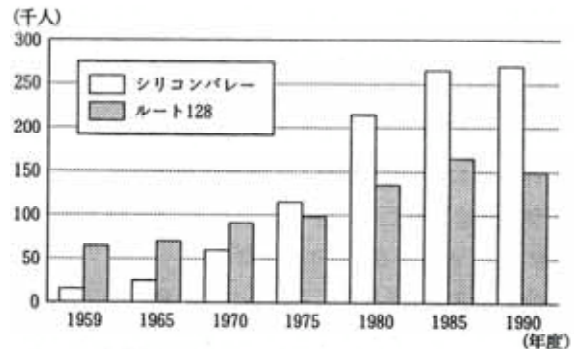
#### ビジネスの世界での交流のメリット

私が京阪奈の関西文化学術研究都市にかかわっていた頃（1980年頃）、関西の主要企業の技術担当の役員に、将来の科学技術についての企業としての考えを聞いてまわったことがあった。その時、何かの拍子に、「異業種交流、とくに異人種交流がいかに大切か」についてに話が移ってしまった。そして某大企業の技術担当専務（その企業の技術についての最高責任者）は、ふいに自分の経験を語りはじめた。

「実は私は液晶分野に会社が進出するかどうかについて決断をせまられていた時期がありましてね。毎日毎日、頭はそのことでいっぱいだったのですよ。進出するとなると、当面何10億円という投資をしなけりやならないし、すぐまた大量の設備投資が必要です。ということは、マーケットの見込みと他社との競合と同時に見込みが立たねばならんわけです。」



左が沖縄水産高校 裁監督



図表4 ハイテク産業総雇用者数  
(シリコンバレーとルート128:1959~90)  
出典:『現代の二都物語』

「異業種交流というか、いろんな人の集まる会合がありましてね。私はできるだけ出ることにはしていたんですが、日頃から気にしているものですから、そこで何気なく、個人的な雑談の中で液晶のことを話題にしてしまったんです。相手は若い人だったんですが、私が『液晶などは今からどうなんでしょうね』と言ったら、相手はやおら腕時計をはずして、その裏側を見せながら『これですか』と言った。そこにはもうひとつの時計があり、それが液晶だったんです。動揺は見せませんでした。背中が寒くなりました。私はすぐさま液晶分野への事業展開を断念しました。どうということもない会合でしたが、そこへ出たことによって、少なくとも当面何10億円かの損失を防ぐことができたのです。人は『ヤル』という決断ばかり賞賛しがちですが、企業にとっては『ヤメル』という意志決定によってマイナスの支出を防ぐことも、同じように大切なことなのです。」

ビジネスの世界では、個別分野については大企業より小企業の方が進んでいることも多いという見本のような話であった。このあと私たちは、学研都市建設はもとより、知的ネットワークや交流の大切さについて話し合った。



97.5.18 NHK「ズームアップ九州、九州一丸で強くなれ、監督会が支える高校野球」



監督親睦会の様子。このあとすぐ立ち話が始まり、立食パーティのようになる - テレビより



監督が集まって練習試合の組合せをつくる。弱いチームも有名校と当たるようにする - テレビより

高校野球でも、企業の世界とは違うかも知れないが、常に弱いチームのみメリットがあるとは言えないのではなかろうか。

地域も元気になり、町も活性化した

枕崎市は台風とカツオで有名なところだが、近年は人口も減っているし（人口27,640人、5年ごとの人口減少率は4.3%、4.0%）、カツオの景気も悪く、元気のない街であった。高校野球の世界でも、3年前は無名だったが、県大会で優勝したことによって街中が元気になってきている。

街の人の声も「10年後にベスト8ぐらいになったら...と思っていたら、3年で県大会に優勝してしまった」と言っていた。

高校が元気になれば街の人々も放っておけなくなる。雨天練習場は閉店したパチンコ店を貸してくれたし、夜間練習のための照明は電気店がつけてくれた。遠征のための費用には、街の人や企業の従業員などのカンパが集まっている。おそらく、地元の人々のビール消費量も上がっているだろう。ひよっとすると、地域の経済成長にとって少しは貢献しているかもしれない。それも、全国大会準優勝の熊本工業に、練習試合とはいえ、勝ったことによる自信が大きいにちがいない。正に「交流は力なり」である。

ハードな基盤と交流手段と知的ネットワークがあれば、ランクアップにつながる

沖縄水産の裁監督は「監督交流会だけじゃないんです。今ではどこもバスを持っています。中古なら100万円ぐらいでも買えます。これがあると交通費が安くなります。1人1回500円ぐらいでいける。10分の1ぐらいです。それと高速道路ができて交流しやすくなりました。うちは九州へいくときも、関西へいくときもバスを持っていきます（別にフェリーで先発させておく）。あちこちの練習場へ行くのも安くて便利です。こっち（沖縄）の子を大勢連れて電車の乗り降りなんて、できたものではない」と話していた。

これを言い換えると、ハードインフラとしての高速道路、交流システムとしてのバス、知的インフラとしての監督交流会、ということになっている。これは正に、地域産業づくり、ベンチャービジネス起こしの話ではないか。そして高校野球でみるかぎり、まず野球王国の関西や四国、東海地方ではなく、九州・沖縄内での交流でランクアップにつながった。そしてそれは九州の一部の有力県だけということにならず、全体のレベルアップになって表れていることはデータが示している。

最後にシリコンバレー優位を書いた前掲の「現代の二都物語」から引用してしめくりたい。「競争優位は一企業だけの問題ではない。地域全体の“文化”こそが決め手になる」。そして九州の高校野球はその“文化”を手に入れたのである。